

〈書評〉

竹内清己著『堀辰雄の文学』

平岡敏夫

はからずもこのすぐれた堀辰雄研究に接することのできた一読者のよろこびを披瀝したいというのが小文を書くモチーフである。

著者竹内清己氏は昭和五十年のころからすでに「かげろふ日記」や「菜穂子」等を対象とする、すぐれた堀辰雄論が七編もあり、今回さらに三編余の新稿を加えて本書を刊行されたのであるが、私那不敏にして、著者につき、いささかの既成知識を持ち合わせることなく本書に接しえたのは、あたかも年譜や作家論によることなく直接に作品に對したのと同様である。このことは本書における著者の方法にも通うものであるが、日ごろ堀辰雄の文学になじみ深いとは言えぬ私にして、本書がかくも魅力的であるのは、ここに新たに堀辰雄の文学が創造的営為のなかに作品として再生しているからにはかなるまい。

著者の方法はむろん、堀辰雄の作品をダシにしておのれを語る式のものとは対蹠的な位置に立つもので、きわめて慎重であり禁欲的であり、柔軟であつて説得的である。I 作品論、II 堀文学の位相の二部より成るが、I の巻頭論文「『聖家族』——方法の制覇——」（新稿）に本書の特徴ないし面目は躍如としてゐる。著者竹内氏の本書における「方法の制覇」をこそ象徴的に語っているとさえ言えるこの論文は、「死があたかも一つの季節を開いたかのやうだつた。」という周知の冒頭の一文の分析からはじまっている。「死」「季節」が抽象化されて機能性と象徴性を獲得していること、この冒頭文と第一章とがみごとに照応していること、「死」が「見えない媒介者」であり、それによって細木夫人と河野扁理とが「一つの季節」において出会い、理解するというふうに進む分析はみごとであり、「あたかも……かのやう」という「不確実な婉曲表現」——「絶対否定はありえない」という、柔よく剛を制す

という見事な機能がそこに発揮される」とする文体にも及び、その擬人法的な構文から「無生物主語の操作が、堀辰雄の文学の自立に大切な働きをしている」というところにまで至るのは感嘆のほかはない。

九鬼・細木夫人・扁理の三角形の構図に細木夫人の娘絹子が入って形づくる四者の関係性を、図示を行いつつ、その帰結（昇華）へと解いて行き、「聖家族」を「きわめて戦略的な方法、計算、予徴による収支決算の行きとどいた小説」とするもの、行きとどいていて説得的である。ユングによりつつ、心理小説と言うよりも「心理」の枠を超えた「幻視」によってこの作品が成っているとする問題提起は、重要で師の芥川龍之介が「『幻視』や幻聴をも自意識において絶対手ばなさいで表出するという固執を生きた」のに対し、堀辰雄は「幻視」を「小説から神話のレベルに移行させることで、自意識や現実からの解放を果し、逆に何もかをひき入れようとしている」というように進み、跡づけて行く。

扁理と絹子の愛の対位法にわずかなずれがあることを見のがさず、そこに介入する細木夫人に関し、「ここでは作者個人の片山夫人への思いといったものに分け入るのでなく、極力作品の内部からの論及にとどまりたい」とする。このような著者の禁欲的な作品論は、「芥川龍之介と堀辰雄自身、片山広子、総子四者の連環を貴種なる家族とし、それをそのまま『芸術(作品)』そのものの形象とする祈念のようなものが働いていたように思われる」、あるいは「堀辰雄は、『聖家族』を書き上げることで、『聖家族』のように自然や生活や現実やら

を、〈方法〉のなかにうばいとるのではなく、〈方法〉をそれらのなかにとかしこんで、もはや見えないものとするにしか自己の文学のアイデンティティはないことを、自己の文学の歴史として、ひそかに感得したのではなからうか」とする地点まで進み出ることを許す(可能にする)、開かれた出口を所有しているのである。この巻頭論文が著者及び本書の達成と方法をまず明確に示していると思われたゆえんである。

二

つづく「風立ちぬ」論は「支配の構造」と副題があるが、その理由は堀辰雄の文学について従来、病氣——弱者——善の文学としていたのを全く逆転して、健康——強者——悪の文学とおきかえ、作品のなかに「他者支配の意志」の潜行を見出そうとするゆえであり、これはまことに新鮮な逆説である。竹内氏がそこに川端康成「禽獣」と類似した特質を感じ、日本の近代文学における「本然悪」にまで思い至り、その成立条件は私小説のスタイルをとらないという結論を導き出しているのもおもしろい。私は著者よりもさらにさかのぼって露伴の「いさなとり」などにもそれを見出したかと思うものだが、〈風立ちぬ世界〉を動かしている作者の支配意力、「堀文学」における対象支配の構造」を言うプロセスも精密である。「かげろふの日記」「ほととぎす」論がつづくが、従来「その興味はもっぱら作品成立の要因にのみ集まって、作品の構造に測鉛を下すものは比較的少ない」という立場で貫かれている。これは堀辰雄研究のみならず、近代文学研究には今も根

強く作品成立論というスタイルが生きているのであり、この点、「かげろふの日記」、さらには軽視されがちだったその続編の『ほととぎす』をも「文学作品としての鑑賞対象にすえたい」とする著者の態度はたいせつだと思ふ。

「存在様式の極北」と副題された『菜穂子』論も力作だが、『菜穂子』という女人の存在が、たとえ相手が誰であろうと夫婦愛にいだかれるに至ることはありえず、「菜穂子」という一人の存在様式が、小説そのものの構造を決定している」とするのはその通りと思ふけれども、「絶望視させられていた荒地からの真の夫婦愛の誕生」という作者のノートを用いたの立論である以上、とにかく堀辰雄が「真の夫婦愛の誕生」という意識を抱いたその事実を打ち消すことはできない。その裂け目をもっと述べてほしかったという気持ちがある。同様かも知れぬが、私としては堀辰雄がそのようにノートに記し、しかも作品においてそれを裏切らねばならなかったという事実深く心うたれるのである。母を拒絶しようとしながら、その意志を裏切って母への同化回帰を志向するという二律背反、そのことによる菜穂子の孤独と虚勢。この指摘はむろんすぐれていると思ふのだが。

作品論としては、以上の四編のほか、『曠野』『ふるさと』と『幼年時代』が並んでいるが、『曠野』では芥川の『六の宮の姫君』との対比が興味深かった。堀辰雄は芥川のこの王朝物最後の作品を最上の傑作としたのであるが、吉田精一氏の「原作がすぐれているだけに、それだけ彼の手がらは少ない」「『極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女』のはかない一生

を、憐れとは思いつつも、敢えてきげすもうとした」(芥川の自虐的な悲しみ云々は後年に付加されたもの)という見解と、堀辰雄の「いかにも華やかなししかも寂しい、クラシックの高い香を放つた、何とも言へず美しい作品」とはやはり開きがあり、私としては、原典を交えての両者の詳細な比較論及があるだけに、その点を堀辰雄よりもっとはつきりさせてほしかったと思ふ。『大和路・信濃路』の編「十月」を援用して『曠野』の結末に女の狐化を見、そこに堀辰雄の国文学・民俗学との冥合を言う独創はむろん忘れることはできない。

従来論じられることのきわめて少かった『ふるさと』を論じて、別荘住まいの宿人から本来の土地人に移り重なうて行ったとする考え、また出生の秘密にかかわる『幼年時代』を、「出生の事実拘束されないので、なにかをさぐることで」作品を自立させようとする試み、それらにも本書のすぐれた特質は明らかにかがえよう。

三

IIの「堀文学の位相」では、三編の論文のうち、冒頭の「関係調整の生理学」と副題した「堀文学成立の位相」が、一高時代のエッセイや小論に論及して、堀文学の本来の生地としての「関係調整」——人生が苦しい課題を私に約束するならば、自分は人生に快適なる生活を約束してやるのだとする「生理学」を指摘していて、きわめて鮮明である。それは「自然主義文学」がともすれば快適な表象というべき白色の部分の苦患の表象である赤色にぬりかえて、人生の暗黒面を強調したよ

うに、逆に苦患の表象である赤色の部分を快適の白色に塗りかえる」云々といった文学史的文脈に置かれていて説得的だが、白樺派の文学とどうかかわるのかという問題も生じてくるかもしれない。

つづく「堀辰雄における古典主義の位相」はさらに明確に文学史的な文脈に置こうとしたものだが、「秩序への意志」としての古典主義が堀辰雄の「ロマネスク」に及んでおり、その純正な継承者の一人に三島由紀夫を数えつつ、両者に共通するラディゲにも論及している。これらは結びの新稿「堀辰雄における国文学的邂逅」にもかかわっており、折口信夫の受容を通して、堀辰雄における日本古典及び日本的なるものを考察しようとする。物語・鎮魂・女人像の検討、折口信夫との出合いの具体的跡づけ、両者の相互理解、と周到にすすめて、堀辰雄の信夫受容が実作の上に十全に生かされなかったとしても、「西洋文学撰取と拮抗しつつ、日本的伝統から、例えば『物語』『民俗』を構造的に蘇生させる道」のあることを見とり、そこにも堀文学の現在があると結んでいるのは、おのずから本書の結論をなして心にくいものがある。

詳細な年譜や文献目録も付載されていて、本書の価値をたかめているが、「方法の制覇」と言い、「支配の構造」と言い、「関係調整」と言い、「秩序への意志」と言い、これらすべては堀辰雄の文学の方法、古典主義ⅡモダニズムⅡロマネスクの特質を言いあてたものであり、そこに堀辰雄が沈めた情念・存在、あるいは説話が逆に息づいてくることを、著者は十二分に明かしている。実はそれこそがすなわち、創造的営為と

しての本書の方法であり、特質であり、そこに沈めた著者の情念にはかならなかつたのである。

(A5判・三二七頁・四八〇〇円・桜楓社)
(筑波大学教授)